ハンドボール競技におけるゴールキーパーの動感能力に関する発生運動学的研究

―ゴールキーピング場面を中心に―

藤田憲将（秋田大学）

１．研究目的

本研究の目的は、優れたゴールキーパーの動感能力の構造を発生運動学（金子、2007）の立場から明らかにすることである。

２．研究方法

令和元年度全日本学生ハンドボール選手権大会の中から研究対象者２名を抽出した。そして彼らが関わったキーピング場面に着目し、観察分析するとともに、対象選手との対話を通して借問分析を行った。その際、筆者とＳ選手、および監督歴 39 年の指導経験豊富なＳ監督とともに共同的に分析した（佐藤、2015）。何故ならば、動きかたの関係性をとらえる必要性があったとともに、筆者の分析が単なる主観に陥らないようにと考えたためである。

３．ゲーム観察及び借問による分析結果とその考察

我々が気付いた優れたゴールキーパーに共通する能力について以下の４つにまとめることができた。

①「遠近感能力」

位置取りを利用して自分とゴールの位置から相手がどのように見えているのかを把握してキーピングを行っている。位置取りは最も重要な技術として身に付けておかなければならないと言える。

②「先読み能力」

先読み能力はミート動作にも必要とされるが、相手のシューターがどこからシュートを打ってくるのかを読み、先に位置を取ることでシュートコースの限定をしていることが分かった。

③「情況把握能力」

選択肢を絞るという技術は情況把握能力も必要で、瞬時の位置取りで左右のコースを限定し、体の動きを利用して上段や下段へのシュートの選択肢を狭めていることが分かった。

④「共感能力」

相手シューターと共感することで、ある程度このタイミングで打ってくるのではないかと先読みすることができる。相手シューターはここにシュートを打ちたいだろうという気持ちを逆手に取り、その裏をかく能力に優れたゴールキーパーはセーブ率も高いと考えられる。

本研究で明らかになったゴールキーパーの動感能力の構造は、始原身体知、およびコツとカンの絡み合いを基に、次のように図式化することができる。

<table>
<tr><th colspan="6">準備・先読み（止めようとする）</th><th colspan="4">駆け引き（止める）</th><th colspan="3">捕る（止めた）・反省</th></tr>
<tr><th colspan="2">位置取り</th><th colspan="2">構え</th><th colspan="2">詰め</th><th colspan="2">フェイント（誘い）</th><th colspan="2">跳び出し</th><th colspan="3">ミート動作</th></tr>
<tr><th>準備</th><th>主要</th><th>準備</th><th>主要</th><th>準備</th><th>主要</th><th>準備</th><th>主要</th><th>準備</th><th>主要</th><th>準備</th><th>主要</th><th>終末</th></tr>
<tr><td>位置を取ろうとする</td><td>正確な位置を取る
正確な位置を取らない</td><td>構えを取ろうとする</td><td>構えを取る
構えを取らない</td><td>詰めようとする</td><td>詰めた
詰めない</td><td>フェイントをしようとする</td><td>フェイントをする
フェイントをしない</td><td>跳び出そうとする</td><td>跳び出した
跳び出さない</td><td>ミートしようとした</td><td>ミートした</td><td>ボールの処理</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜コツ＞
・遠近感能力
・予感化能力
・（直感化能力）</td><td colspan="2">・遠近感能力
・予感化能力
・（直感化能力）</td><td colspan="2">・遠近感能力
・予感化能力
・（直感化能力）</td><td colspan="2">・遠近感能力
・直感化能力</td><td colspan="2">・遠近感能力
・直感化能力</td><td colspan="3">＜ミート動作中＞
・定位感能力　・遠近感能力
・直感化能力
＜ボール処理後＞
・コツ触発化・コツ価値覚
・コツ共鳴化動感力</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜カン＞
・状況把握能力</td><td colspan="2">・状況把握能力</td><td colspan="2">・先読み能力
・状況把握能力</td><td colspan="2">・状況把握能力</td><td colspan="2">・先読み能力
・状況把握能力</td><td colspan="3">・状況把握能力
・先読み能力
（予描・偶発先読み能力の両方）
・徒手伸長能力
・状況把握能力</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜理由・意味＞
・ゴールの左右のコースの限定</td><td colspan="2">・ゴールの上下のコースの限定や誘い</td><td colspan="2">・相手がシュート体勢に入る前
・ゴールの上下左右のコースの限定
・前後の駆け引きのスタート位置</td><td colspan="2">・ゴールの上下のコースの限定や誘い
・駆け引き</td><td colspan="2">・相手がシュート体勢の時
・ゴールの上下左右の限定
・ループシュートは無いと判断した時</td><td colspan="3">・ボールを止める
・その後のボール処理</td></tr>
</table>

図1　ゴールキーピングの動感能力の構造　　＊それぞれの動きの境界線は無い

４．結論

本研究を通してゴールキーパーの動感能力を明らかにしようと研究してきたが、分析を進めていく中で、今までの外的な視点からの構造とは違った、ゴールキーパーの動感構造をまとめることができた。従来では、「詰め」はゴールキーピングにおける主要局面であると考えられてきたが、ゴールキ―ピングの動感能力によると、「詰め」の動きは準備・先読みカテゴリーに分類することができると言える。

今回の研究課題として、筆者自身、借問分析を行った経験が少なかったため、筆者自身が引き出したいと考えていた回答を十分に得ることができなかった。借問能力を高めるためには、やはり実践を通して運動の多様な動感応力に迫ることができるよう、教えられるように覚えることを幾度も経験していかなければならないと考える。

（文献省略）